

〔論文〕

アイスランド語のウムラウト

——名詞格変化の多様性——

八 亀 五三男

名古屋学院大学外国語学部

要 旨

ゲルマン諸言語では、ウムラウト現象が大きな言語的特徴になっている。中でも、北ゲルマン語に属するアイスランド語には、他のゲルマン語に見られないような複雑なiウムラウト, uウムラウトが観察できる。ウムラウトという音韻現象を分析することによって、共時的言語現象を新たに通時的な視点から見直してみることがいかに重要であるかを明らかにするのが本稿の目的である。

キーワード：ウムラウト，口蓋化・唇音化，ゲルマン語，格変化，通時態

Umlaut in Icelandic

——inflectional variation of nouns——

Isao YAKAME

Faculty of Foreign Studies
Nagoya Gakuin University

I はじめに

言語の形態論には、語幹の音韻を変化させることにより(あるいは音韻が変化することにより)その語の文法的機能を別のものに变えることができるシステムが備わっている。

英語の名詞に goose – geese, mouse – mice などの不規則な複数形、あるいは動詞の不規則変化に catch – caught, lie – lain などがあるが、われわれが長年にわたり慣れ親しんでいる言語なので、同一語の変化形であることは容易に想像できる。しかし、mouse – mice, lie – lain をはじめて目にした人は、本当にもともと同一語であるのか疑問視するかも知れない。

本稿で扱う、アルファベットが非常に豊富なアイスランド語の語彙に接すると、26文字の英語に慣れている人はさらに大きな戸惑いを感じずに違いない¹⁾。

ömmu minni

これを英語に訳すると、‘(I gave a birthday present) to my grandmother’ となる。アイスランド語のどこに英語の ‘to’ に当たる語が存在するのか、その必要はないのである。なぜならば、名詞に格変化を有するアイスランド語においては、(単数) 与格の形態にすれば「～に (対して)」という意味が自動的に付与される(アイスランド語では my に当たる所有代名詞は名詞の後に置かれる)。

‘My grandmother (is ...)’ のように (単数) 主格であれば、

amma mín

とすればいいのであって、英語のように文中での位置関係を考慮する必要はなく、(形容詞も含めて) その名詞だけで統語的な機能を担っていることになる。これが、名詞類に (文法) 性、数、格の文法範疇を持つ言語の大きな特徴である。

このような義務的文法範疇を背負った言語では、いくつかの異なった形式 (amma, ömmu) が同一語の変化形であると判断するのが困難な場合が頻繁に起こる。

本稿においては、アイスランド語の言語的特徴である (特に名詞類における) 「母音変化の多様性」を明確にすべく、実際の具体例を観察することによって、アイスランド語の本質に迫っていきたいと思う。

II ウムラウトとは

「ウムラウト」というと、まずドイツ語のウムラウトが頭に浮かんでくる。実際ウムラウトとはドイツ語の (der) Umlaut であり、英語では vowel mutation となる。ではドイツ語でいうウムラ

ウトとはいったいどういうものなのか、M. G. O'Brien & S. M. B. Fagan は以下のように説明している²⁾：

- (1) the diacritic <¨> placed over the vowels <a>, <o>, and <u> in German
- (2) the replacement of a plain vowel by its umlauted counterpart as part of a grammatical process (for example, the replacement of <u> by <ü> in <Bruder> ‘brother’ to form the plural <Brüder> ‘brothers’)
- (3) a sound change in which a back vowel assimilates to a front vowel in a following syllable (for example, the <ö> in a word like <öfter> ‘more often’ came about in the history of German through the assimilation of <o> to a following <i> that occurred in an earlier form of the word)

ウムラウトとはこの定義によると、

- (1) ウムラウト記号 <¨> そのもの
- (2) 「兄弟」を意味する Bruder から複数形 Brüder を形成するために用いる母音変更プロセス (u → ü)
- (3) 歴史的な時間経過の中で（通時的に）、本来 o であった音が後続する音節の前舌母音の影響を受けて ö に変質した音変化

の三つである。

例えば、ドイツ語の Buch [book] は、以下のように数・格の変化を行う：

単数1格 Buch
 2格 Buch[e]s
 3格 Buch[e]
 4格 Buch
 複数1格 Bücher
 2格 Bücher
 3格 Büchern
 4格 Bücher

これをアイスランド語、デンマーク語、英語と比較すると、どのような相違が見えてくるであろうか。

	ドイツ語	アイスランド語	デンマーク語	英語
単数1格	Buch	bók	bog	book
2格	Buch[e]s	bókar	[af] bog	[of] book
3格	Buch[e]	bók	[til] bog	[to] book
4格	Buch	bók	bog	book
複数1格	Bücher	bækur	bøger	books
2格	Bücher	bóka	[af] bøger	[of] books
3格	Büchern	bókum	[til] bøger	[to] books
4格	Bücher	bækur	bøger	books

一応ここでは、ドイツ語の格表示の順番に従って1格、2格、3格、4格とするが、それぞれはギリシャ語、ラテン語などという主格、属格、与格、対格のことである。

ドイツ語とアイスランド語では名詞に格変化が存在するのに対して、デンマーク語と英語にはそれがない。デンマーク語、英語には「～の」「～に」の意味を明確にするために、前置詞の af, of; til, to を付けてある。

ここでいかなる相違を観察できるであろうか。

ドイツ語においては複数全体に同一のウムラウト母音 ü が見られるが、アイスランド語では複数で2種類の母音 (ó, æ) に分かれる。格変化のないデンマーク語ではドイツ語と同じ言語事情で ø 1種類である。すなわち、アイスランド語は他の2言語に比べると、より複雑な言語変化を示していると言える。英語に至っては、単数・複数で母音は全く同じである。

上で示したように (Buch [book] – Bücher [books]), ドイツ語には複数形で母音が変音する語が多く存在する:

Baum [tree] – Bäume [trees], Hand [hand] – Hände [hands], Sohn [son] – Söhne [sons], Wort [word] – Wörter [words], Frucht [fruit] – Früchte [fruits], Mutter [mother] – Mütter [mothers] など

アイスランド語との比較において注意すべき点は、Bücherの例でもわかるように、ドイツ語複数形4つの格全てにおいて同一の変母音であることである。また、母音変化の仕方も a → ä, o → ö, u → ü と同じ文字同士の変音であって、a → ö, o → ü などはないことである。しかしながら、アイスランド語においては、amma – ömmu, bók – bækur のように、もとの基本文字が別の文字に変化し、またさらにウムラウト記号を持つ音に変化している。

ただ、格変化を有する言語に言及する時是非とも注意すべき点がある。それは Buch は book ではない、Bücher は books ではないということで、ドイツ語 Buch, Bücher は単数・複数の1格(主格)であるという情報を内蔵している言語事実である。つまり、Buch はこれだけで「1冊の本が

……」, Bücher はこれだけで「5冊の本が……」という意味を持っている。

さて、今述べたウムラウト現象はゲルマン語で頻繁に発生し、ゲルマン語音韻論の一大特徴となっている（以下の例は全て [foot - feet] の意味である）。

	単数 複数
英語	foot - feet
ドイツ語	Fuß - Füße
デンマーク語	fod - fødder
スウェーデン語	fot - fötter
アイスランド語	fótur - fætur

英語の場合、単数 fōt → 複数 * fōtiz → * fētiz（ウムラウト：ō → ē）→ -iz 消失 → fēt → feet という言語的プロセスにより現代英語の複数形（foot → feet）が発生したのであって、他のゲルマン語も同じような通時的変化を行っている。これは i ウムラウトと呼ばれている。後続する強い前高母音 i により、前にある語幹母音の調音位置が i に引っ張られ別の音に変化する現象である。これは口蓋化（palatalization）とも呼ばれている、

なお、後続する後舌母音 u に影響を受けた場合は、u ウムラウトと言う。これは唇音化（labialization）とも呼ばれている³⁾。

また、英語では、oo - ee となるが、他のゲルマン語ではウムラウト用に異なる特殊文字を使用していることに注意すべきである。なお、ドイツ語の複数形で、他言語のように t, d にはならず ß [= ss] となっているのは、ドイツ語音韻史の内部事情による。

さきほど、ウムラウト現象はゲルマン語の大きな特徴と述べたが、印欧語的観点からラテン語と比較しておきたいと思う。すなわち、ラテン語ではウムラウトが発生していないことの確認である。

[foot] を意味する語彙の印欧祖語形は * ped- として再構されている。ゲルマン語では、母音が e 階梯から o 階梯に交替、そしてその o が長音階梯 ō に移動し、現代のゲルマン諸言語の語彙形態に至っている。また、子音については * p → f（破裂音 → 摩擦音）* d → t（有声音 → 無声音）の通時的変化を起こしている。

ラテン語は印欧祖語形の * ped- をそのまま受け継ぎ、単数主格は pēs, 単数属格以降は全て pedis などとなっている。すなわち、単数主格のみ ē と長母音なのである。しかし、pēs も他の格と同様元来 ped- という語幹であり、d が落ちることによって e が長音化したというだけの現象である。結局、ラテン語 pēs は単数複数とも全格において母音は e であり、ウムラウトは発生していない⁴⁾。

Ⅲ アイスランド語のウムラウト

ここまではドイツ語文法に合わせて、格の名称を1～4という数字を用い、また順番も1格, 2格, 3格, 4格としたが、ここからはアイスランド語中心に議論を進めていくので、名称も順番も主格, 対格, 与格, 属格（それぞれドイツ語の1格, 4格, 3格, 2格）とする。

まず以下の二つのアイスランド語文から始めることにする：

1. Þaðan fer ég til Englands.

[From there I travel to England.]

2. Hestarnir eru í túninu.

[The horses are in the field.]

1の最後にEnglandsという語があるが、Englandが格変化した形であることは容易に想像できる。それは、母音に全く変化がないからである。tilは属格支配の前置詞で、EnglandsはEnglandの単数属格形である。

2においては、hestarnirの-nir（後置定冠詞）を見破ることができれば（hestar - nir），hestarがhestur [horse]（男性名詞）の複数主格であることは容易に理解できる。それは、hestur - hestarの語幹母音に変化がないからである（両形とも-e-）。最後のtúninuも同じことであって、母音が同じなので、túninuはtún [field]の後置定冠詞形tún-inu（中性名詞：単数与格）だとすぐにわかる。

しかしながら、アイスランド語の変母音の多様性、複雑性を理解するためには、以下の例に注目する必要がある：

1. Hann reis á fætur. [He got to (his) feet.] (reis 3人称単数過去 < rísa [to rise])
2. Þeir eru synir hennar. [They are her sons.]

1にfætur, 2にsynirという名詞が見られるが、これら2語はそれぞれは数・格変化を被っている複数対格, 複数主格であるので、*Icelandic-English Dictionary*を引いても見出し語とはならない。辞書の見出し語となる単数主格のfótur, sonurを知らなければ、辞書は無用の長物である。

英語でsonsの意味を調べようと思えば、複数の-sを取ってsonを辞書で引けばいい。しかし、アイスランド語ではウムラウトが頻繁に起こるので、その母音変化のパターンを知っておく必要がある。アイスランド語を正しく理解するためには、名詞が変化する時のウムラウト、数・格語尾の多様性に全神経を集中しなければならない。

それでは、アイスランド語の名詞格変化をさらに詳しく見ていくことにしたい。ここでは、上

記の sonur を含めて、3つの名詞の格変化を提示する：saga [story], barn [child], sonur [son]。

単数主格	saga	barn	sonur
対格	sögu	barn	son
与格	sögu	barni	syni
属格	sögu	barns	sonar
複数主格	sögur	börn	synir
対格	sögur	börn	syni
与格	sögu	börnum	sonum
属格	sagna	barna	sona

これらの格変化で、各語の語幹に2種類の母音が存在している。例えば、saga の場合 u が後続する時は全て a→ö となっており（u ウムラウト）、sonur の場合 i が後続する時はいつも o→y となっている（i ウムラウト）。

それでは barn にはいかなる現象が観察できるであろうか。複数与格は sögu と同じように u(m) が後続するので、börnum と u ウムラウトを起こしている。では複数主格（対格）はどう説明すればいいのであろうか。u が後続していないのに u ウムラウトが発生している（börn）。

この言語現象を説明する時、通時的な観点を導入する必要性が出てくる。すなわち、

börn < *börnu < *barnu

のような時間的経緯をたどって börn が生まれたプロセスを設定しなければならない。もともと barnu だったが、u が a に影響を与え ö に変化させた後、u 自身が消滅したと考えることができる（II 章の foot – feet の例を参照）。

後からまた議論をするが、共時的な言語現象の中には必ず通時的な力が働いた痕跡が残っている。それを明確にすることによってのみ、現在の言語状態を正しく理解できるのである。

さらに次の dagur [day] の例を見ていただきたい。3種類の母音が観察できる。すなわち、単数主格の a が基本となって、i ウムラウトと u ウムラウトが同一語の中に同時発生しているのである：単数与格 degi (a→e)⁵⁾、複数与格 dögum (a→ö)。

単数主格	dagur
対格	dag
与格	degi
属格	dags

複数主格	dagar
対格	daga
与格	dögum
属格	daga

ウムラウトを含む複雑で難解な名詞変化を見てきたが、以下の例はたぶんアイスランド語でももっともやっかいな語彙と言つてよいと思われる：köttur [cat], fjörður [inlet]。

単数主格	köttur	fjörður
対格	kött	fjörð
与格	ketti	firði
属格	kattar	fjarðar
複数主格	kettir	firðir
対格	ketti	firði
与格	köttum	fjörðum
属格	katta	fjarða

これについては、M. Péturssonが明確な説明を行っている⁶⁾：

Köttur und **fjörður** sind Beispiele für Wörter, in deren Flexion u-Umlaut im Nom., Akk. Sg. und im Dat. Pl. und i-Umlaut im Dat. Sg und Nom., Akk. Pl. auftritt. In **fjörður** findet außerdem eine Brechung statt: ö-Brechung im Nom., Akk. Sg. und im Dat. Pl. und a-Brechung im Gen. Sg. und Pl.

Köttur と fjörður には次のような音韻現象が見られる：単数主格・対格と複数与格に u ウムラウト，そして単数与格と複数主格・対格に i ウムラウトが生じている。さらに，2 つ目の fjörður においては，単数主格・対格と複数与格に ö 母音割れ，そして単数・複数属格に a 母音割れが起こっている（「母音の割れ」Brechung, breaking とは-jö-, -ja-のこと）。

すなわち，fjörður の格変化においては，同一語の中に i ウムラウト，u ウムラウト，母音の割れという複雑な音韻現象が同時に発生しているということになる。

アイスランド語名詞格変化の多様性はこれら以外にも見ることができる。ただし，最初に単数主格の形を示し，ハイフンの右に変音した母音形を併記するにとどめたいと思う。母音の多様性を示すのが目的なので，数・格は特に示すことはしない。

land – löndum [land]

faðir – föður, feðrum [father]

maður – menn, mönnum, manna [man]

höfn – hafnar [port]

mörk – merker [forest]

önd – andar, endur [soul]

dóttir – dættur [daughter]

hönd – handar, hendi [hand]

mús – mýs [mouse]

また、形容詞にも名詞と同様の母音変化が見られる（ここでは、強変化と呼ばれる変化形のみを提示する）：langur [long]。

	男性	女性	中性
単数主格	langur	löng	langt
対格	langan	langa	langt
与格	löngum	langri	löngu
属格	langs	langrar	langs
単数主格	langir	langar	löng
対格	langa	langar	löng
与格	löngum	löngum	löngum
属格	langra	langra	langra

名詞と同じように、単数与格、複数与格などでuウムラウトが起こっているのが見て取れる。女性単数主格は元来*lang-uのようにuが語幹末に付加されていたが、ウムラウトの原因となった後通時的に消滅したと推測するのは容易である。

IV 結語

今までは名詞についての議論を行ってきたが、ここで動詞にもウムラウト現象が生ずることを示し、さらにアイスランド語のこの音韻現象がいかに複雑であるかを提示したいと思う。

1. Hún ætlar að kaupa kött. [She plans to buy (a) cat.]
2. Hann keypti bækurnar. [He bought the books.]

1のkaupa [to buy]は不定詞で、2のkeyptiは3人称単数過去である。これは弱変化動詞なので、英語の規則変化動詞の過去形のように歯音(t, dなど)を不定詞語幹末に付加すると過去形が形成できる。しかしながら、kaup + ti → kauptiとはならないで、-tiにより母音がiウムラウトを起

こし, keypti と変化した (au → ey)。

しかし, keypti を見た時に, すぐ kaupar という不定詞形を連想することができるであろうか。これがアイスランド語の複雑性, 難解性と言うことができる。

次のアイスランド語文を見ていただきたい:

3. Hann orti í Reykjavík.

意味は “He wrote poetry in Reykjavík.” で, orti はある動詞の3人称単数過去形で, -ti は弱変化動詞の過去形を作る時の歯音である (例えば英語の talk-ed)。不定詞がどのような形態であるのかを推量するのが異常に困難である。それは yrkja [to write poetry] なのだが, 不定詞 (現在) → 過去が yrkja → orti と変化しており, これら2つの形態 yrkja, orti が同一の動詞であると判断するのが非常にむずかしい。

しかし, この同一性を説明しなければならない。

H. Andersen は “nogle verber er uden omlyd i præter. og præter. partc. yrkja – orti – ortr” 「いくつかの動詞においては, 過去, 過去分詞にウムラウトはない」とし, yrkja – orti の例を挙げている⁷⁾。すなわち, [+Umlaut] yrk- と [-Umlaut] ork- を設定し, 前者からは yrkja [to write poetry], yrki [I write poetry] が誕生し, 後者からは通時的な

orkti → ortti → orti

というプロセス (-rk + ti → -rtti → -rti) を経て, orti が出来上がったとするのが妥当な結論であると思われる⁸⁾。

共時的な言語現象の解決には, 通時的な言語変化の視点を導入することがいかに重要であるかを示している。

最後に, III章でも扱った barn [child] (中性名詞) の複数主格 börn [children] を例に取り, 時間の流れを考慮した視点とはいかなるものかをもう一度考えておきたい。

B. Kress はその著書『アイスランド語文法』*Isländische Grammatik* の中で

Durch ein *u* konnte ein vorausgehendes *a* zu *ö* umgelautet werden (*u*-Umlaut). Das umlautbewirkende *u* ist im Lauf der Sprachentwicklung

1. geschwunden: börn (< **barnu*) NPN ‘Kinder’: barn NSN ‘Kind’
2. erhalten geblieben: við köllum ‘wir rufen’: kalla ‘rufen’

と述べている⁹⁾。

要約すると、u ウムラウトを被って a→ö と変音した後、

1. 影響を与えた u が消失する
2. 影響を与えた u がそのまま残る

この2つの可能性がある、というのである。

これは、次のようにまとめることができる。ただし、同一語の比較によりこの音韻現象を明確にするために、B. Kress が挙げている 2 の köllum の代わりに börnum（Ⅲ章の変化表で示した barn の複数与格）を使用する。同じ種類の音韻現象であるので全く問題はない。

	A	B	C	D	E
1. börn		< börn(u)	< börnu	< barnu	< barn-u
2. börnum			< börnum	< barnum	< barn-um

E の段階で -u(m) が語幹末に付加される、D で 1 語となる、C で u ウムラウトが発生する。

1 では B の段階で -u が消失し A に至る。2 では B の段階を経過しないで A に至る。

時間の流れの中で形態がどのように変化してきたのか、を確認することが言語研究において非常に重要な作業になる。

「barn の格変化には u ウムラウトの börn も存在する」は、単に共時的な事実を述べただけであって、何ら本質的説明になっていない。

そこにはその言語が辿って来た貴重な言語史があることを常に意識すべきである。

現在	～	現在
ö	～	a

ではなく、

現在	←	過去
ö	←	a
}		
a	←	a

という時間軸を考慮した通時的観点が必要である。「barn と börn は、単数主格、複数主格として現在共時的に交替する」ではなく、「現在の börn は過去においては barnu であり、現在は消失している語末の u が通時的に börn というウムラウト形を産み出した」である。これは、Ⅱ章のウムラウトの定義で示した視点（3）の重要性を指摘したことになる。

このように通時的視点から言語分析を行うことにより、共時的変化そして通時的言語変化が立体的に、三次元的に明示できるようになると言える。

注

- 1) アイスランド語のアルファベットは以下に示す通りである（小文字のみ）。
a á b c d ð e é f g h i í j k l m n o ó p q r s t u ú v w x y ý z
þ æ ö
- 2) O'Brien, M. G. & S. M. B. Fagan. *German Phonetics and Phonology*. p. 368.
- 3) 特にiウムラウトの例、音声学的にいうと前高の発音iに影響される例が非常に多く観察される。Bruno Kressは、iウムラウト、uウムラウトの代わりに、これらの母音の調音特徴を生かして、Palatalumlaut(口蓋化), Labialumlaut(唇音化)という用語を用いている (*Isländische Grammatik*. pp. 43-44)。
- 4) 以下にpēsの格変化表を示す：

	単数	複数
主格（呼格）	pēs	pedēs
属格	pedis	pedum
与格	pedī	pedibus
対格	pedem	pedēs
奪格	pede	pedibus
- 5) B. Kress. *Isländische Grammatik*. p. 61.
- 6) *Lehrbuch der isländischen Sprache*. p. 61.
- 7) *Oldnordisk Grammatik*. p. 90.
E. V. Gordon も “no i-mutation in the pa. t. and pp.” と同じことを述べている (*Introd. to Old Norse*. p. 305)。
A. Noreen は orti のノルド基語 (urnordisch) の形態として、worahto という形を提示している (*Altnordische Grammatik*. p. 235)。
- 8) S. Valfells & J. E. Cathey. *Old Icelandic*. pp. 114-5. を参照した。
- 9) *Isländische Grammatik*. p. 44.

参考文献

- Andersen, Harry. *Oldnordisk Grammatik* (København: J. H. Schultz Forlag, 1966)
- Árnason, Kristján. *The Phonology of Icelandic and Faroese* (Oxford: Oxford University Press, 2011)
- Einarsson, Stefán. *Icelandic* (Baltimore: John Hopkins Press, 1949)
- Eskeland, Ivar, K. Heggstad & M. Stefánsson. *Lærbok i Islandsk* (Oslo: J. W. Cappelens Forlag, 1974)
- Gordon, E. V. *An Introduction to Old Norse* (Oxford: Clarendon Press, 1971)
- Kapovi, Mate. *The Indo-European Languages* (London & New York: Routledge, 2017)
- Kress, Bruno. *Isländische Grammatik* (Leipzig: VEB Verlag Enzyklopädie, 1982)
- Noreen, Adolf. *Altnordische Grammatik I* (Tübingen: Max Niemeyer Verlag, 1970)
- O'Brien, M. G. & S. M. B. Fagan. *German Phonetics and Phonology: Theory and Practice* (New Haven & London: Yale

University Press, 2016)

Pétursson, Magnus. *Lehrbuch der isländischen Sprache* (Hamburg: Helmut Buske Verlag, 1987)

Ranke, Friedrich & D. Hofmann. *Altnordische Elementarbuch* (Berlin: Walter de Gruyter, 1967)

Valfells, Sigrid & J. E. Cathey. *Old Icelandic. An Introductory Course* (Oxford: Oxford University Press, 1981)